中欧2008年夏

渡辺　　肇
倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

（2008年10月1日　受理）

1）ドイツ外務省訪問

ドイツの首都が暫定首都のボンからベルリンに移って今年で10年となる。その際に各省庁の新庁舎を国民に御披露目したのが好評で毎年公開する事となり今年で10回目を迎えた。ベルリンが東西に分割されていた際には都心区は東ベルリンに属していたので政府省庁の庁舎も大部分が旧東ベルリン地区に所在する。昨年は首相官邸と大蔵省を訪問したので、今年は旧東ベルリンにある外務省と旧西ベルリンにある国防省を訪問する事とした。

先ず訪れたのは外務省である。外務省の庁舎は帝政時代、ヴァイマール共和国時代、第３帝国時代を通してドイツの中央銀行であったドイツ・ライヒス銀行本店の建物を使用している。その１部は昨夏までは第２次大戦後の中央銀行であり本店がフランクフルトに所在するドイツ・ブンデス銀行ベルリン支店として使用されていたが、支店拡大のため移転された。

この建物はヒトラーが1933年に政権を取ってから初めて着工された公共建築物であったので、ヒトラーも力を入れた建物であり、1934年から1940年にかけて建設された。この建物も数奇な運命を辿(たど)っている。1990年にドイツが再統一されるまでは東ドイツの政権党であり、ソ連占領地区の共産党（KPD）と社会民主党（SPD）が合併して出来たドイツ社会主義統一党（SED）の本部として使用されていた。ドイツ・ライヒス銀行の役員が使用したフロアーは党の全権を握るSED政治局員達のフロアーとなった。現在では外務大臣や３人の次官たちの執務室フロアーとなっている。庁舎の公開は徹底したもので、そこにある大臣執務室や大臣応接室の中まで入ることが出来た。その近くにある大臣以下幹部が会議を開くビスマルク・ルームと言う名の中会議室にも入ることが出来た。この部屋で現在は毎朝外務省最高幹部達の情報交換会が開かれている。東独時代にはこの部屋で政治局会議が週２回開催されていたとの事だ。東独では２回宮廷革命が起きて、実権を握っていたウルブリヒト第１書記が1971年に、ホーネッカー第１書記が1989年に、解任された。それもこの部屋に於いてだった。ドイツ・ライヒス銀行の時代には総裁以下が金融政策を論じ合ったのであろう。その部屋にいるとそれらの歴史が目に浮かんで来る様で誠に面白かった。

ドイツ・ライヒス銀行時代には営業窓口が並んでいた１階の大広間は大会議室となっていた。ドイツ社会主義統一党の中央委員会総会が開催されたり、1990年に東独最後の国会

が開かれ西独への合邦を決めたのもこの部屋に於いてであった。この大広間に幾つかの机を置いて外交官達が国民にクイズなどでサービスしていた。私もある机の前でクイズに参加した。イスラエルが建国されたのは何時だと聞かれ、1948年だと答えると正解で賞品にスーツケース用のベルトを貰った。ユダヤ人迫害の過去を背負うドイツの外務省らしい質問だと思った事だ。

分厚い扉を通って地下の大金庫室にも入った。現在は外務省の危機対応室になっており、幾つものスクリーンや電話やコンピューターが設備され、大臣以下が座る会議室にも入れた。戦争、ハイジャック、大天災等が生じた際には実際に使用されているとの事だった。公開の徹底性には誠に感心した。

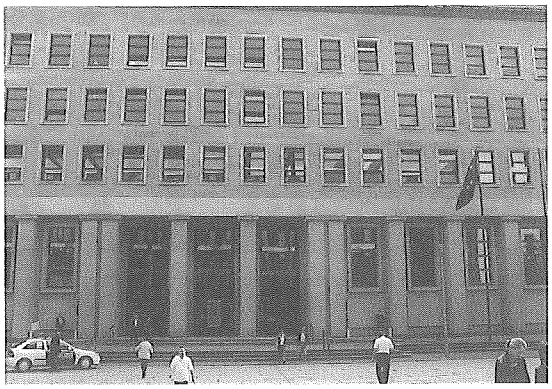


図1．ドイツ外務省の建物（元ドイツ・ライヒス銀行本店、ドイツ社会主義統一党本部）

2）ドイツ国防省訪問

次に訪れたのは国防省だった。柵の中には「軍事施設につき、不法立入者は射殺される。」とあり、物々しい雰囲気であった。門には大勢の武装憲兵が立っていて、首相官邸や、大蔵省や、外務省では求められなかったのに、旅券の提示が要求された。この敷地の一連の建物はベンドラー・ブロックと呼ばれている。1911～1914年にそれまで市内に点在していたドイツ帝国海軍の庁舎を統合して建設されたものだ。19世紀末から20世紀初頭に掛けて、当時世界一であった英国海軍に挑戦した建艦競争の結果、大膨張したドイツ帝国海軍には必要であったのだ。海軍省、海軍軍令部、海軍侍従武官府等が置かれたのだ。

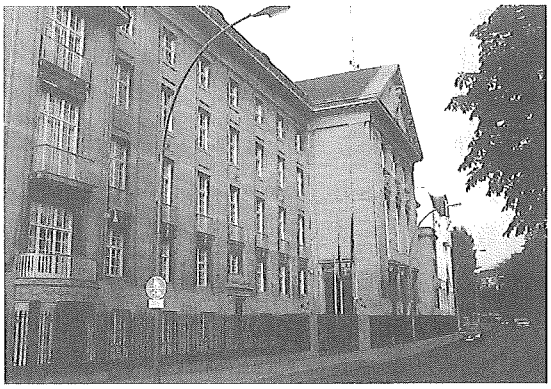


図2．ドイツ国防省本館（ベンドラー・ブロック）

図3．軍用地につき不法侵入は射殺されるという警告

第１次世界大戦敗北後には、ヴェルサイユ条約により陸海軍共に兵力量が大幅に制限され、参謀本部や、航空兵力や、潜水艦や、戦車等の保有も禁止され、こじんまりとしたドイツ国防軍（ライヒスヴェアー）が設置された。広大な庁舎は国防省として利用され、海軍のみならず陸軍も使用する事となった。この国防軍は帝政時代の将校に牛耳られていて反共和国的であった。1920年３月13日にヴァイマール共和国を打倒しようとするカップ一揆が起きた際には、実質的な参謀総長であった国防省軍隊局長のフォン・ゼークト少将が「友軍相撃は出来ない。」と反乱軍の鎮圧を拒否した為に政府はベルリンを脱出してシュツットガルトに脱出せざるを得ない状況であったのに、一揆が失敗した後も、フォン・ゼークト将軍は解任されず依然として実権を持ち続けていた有様であった。

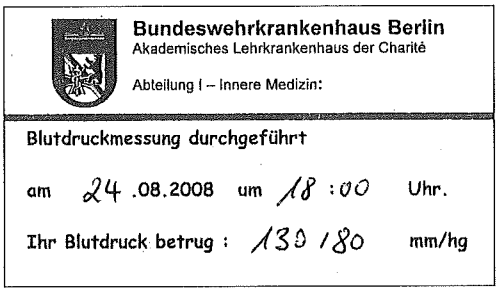
1933年にヒトラーが帝国宰相となると、国防軍も名を変えてライヒスヴェアーからヴェーアマハトとなる。翌1934年にヒンデンブルク大統領が死去すると、ヒトラーは大統領職を兼任する事となり、ドイツ国防軍将兵はヒトラー個人への忠誠を誓わされる事となるのである。プロイセンの地主貴族であるユンカーの出身者が主流を成したエリートの将校たちは、非エリートの中下層階層を支持者とするヒトラーの民族社会主義（ナチス）運動に対しては成上がり者達だとして軽蔑し冷淡であったが、軍備拡大が為される限りは反対行動を取ることは無かった。

国防軍の反対にも拘らず、1939年に第２次世界大戦が始まる。当初はヒトラーの打った手が総て当たり国防軍も表立った反対は出来なかった。ベンドラー・ブロックは陸軍最高司令部となり、建物の一部は隠密な形で行われた反ヒトラー運動を形成したカナリス提督が率いた防諜本部にも使用された。1943年にパウルス元帥指揮のドイツ第６軍がスターリングラードでソ連赤軍に包囲されヒトラーの反対にも拘らず降伏するとドイツがこの戦争に勝利できない事が明らかになる。国防軍の幹部たちは、ヒトラーがいる限りドイツは破局を迎えざるを得ないと考え、ヒトラーを暗殺して連合国との和平を図るべきだとするヴァルキューレ作戦を秘密裏に始めた。

ヒトラー暗殺の実行役を果たしたのは陸軍最高本部の参謀将校でベンドラー・ブロックに勤務していた伯爵クラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐である。1944年７月20日シュタウフェンブルク大佐は東プロイセンにあった大本営ヴォルフス・シャンツェで陸軍の作戦につきヒトラーに直接報告する事となっていた。共謀者である副官と共にベルリンを早朝飛行機で出発したシュタウフェンベルク大佐はヒトラーの作戦会議室に入り、爆弾を仕掛けた鞄を作戦地図テーブルの下に置いてそのまま姿を消した。ヒトラーが着席して作戦会議が始まると爆弾は爆発し多数の死傷者が出た。しかしヒトラーは奇跡的に軽傷で済んだ。飛行機でベルリンに帰ったシュタウフェンブルク大佐は即日逮捕され、その夜ベンドラー・ブロックの庭で銃殺された。この陰謀に絡んだ将軍たちや高級将校たちも即日、あるいは人民裁判を経て２，３ヶ月以内に処刑された。現在のドイツはこの抵抗運動を高く評価して、シュタウフェンブルク大佐処刑地の跡は抵抗記念館となっている。

この様にドイツ現在史で様々な役割を果たしたベンドラー・ブロックは現在国防省として使用されている。建物の内部に入るのには厳しいチェックがあり旅券を取り上げられた他、カメラや携帯電話も取り上げられた。建物の内部にも多数の武装憲兵たちが厳しく目を光らしていた。しかし、このベンドラー・ブロック本館の中にある大臣室には入る事が出来た。大臣が外国訪問した際に貰った種々の記念品もガラスケースの中に展示してあった。総て国有財産で私物としたい場合は第三者が評価した価格で購入出来るそうだ。拳銃とか短剣とかの武器が目立った。中には中国人民解放軍からの宝石をちりばねた短剣もあった。

建物の外には戦車、戦闘機等の展示の他、幾つもの天幕を張って広報活動が行われていた。ドイツの義務兵役期間は9ヶ月なのでどうしても短過ぎて、アフガニスタン等への海外派遣の兵員が不足している様だ。それで9ヶ月を越えて兵役延長を志願させるのに必死の有様だ。自衛隊と同じように衣食住総てただで9ヶ月を越えて勤務すると給与も倍増し退職金も貰えると懸命に訴えていた。またベルリン国防軍病院の衛生兵が血圧を測ってくれた。若い20歳の衛生一等兵だった。ドイツ人にとって東洋人の年齢を判断するのは非常に困難だと言われているので、この衛生兵に筆者の年齢を当てさせた。40～50歳と言って貰えると期待したが、さすがは専門家だ。60歳過ぎでしょうと言われ全くがっかりした。


Bundeswehrkrankenhaus Berlin
Akademisches Lehrkrankenhaus der Charité
Abteilung I – Innere Medizin:

Blutdruckmessung durchgeführt

am 24.08.2008 um 18:00 Uhr.

Ihr Blutdruck betrug: 130/80 mm/hg

図4．ベルリン国防軍病院の血圧測定証明書

現在航空自衛隊の次期戦闘機の選定が行われている。米軍の最新鋭機F22を選びたいのだが、機密が漏れるとの米議会の反対に会い苦慮している様だ。それで、その代わりの候補の一つが独、英、西が共同開発した最新鋭戦闘機のユーロ・ファイターだ。多数張られていた天幕の一つの中にユーロ・ファイターの座席をそのまま使用したシュミレーターがあった。外国人には触らせて貰えないと思ったが、そこにいた将校に頼んだらOKとなった。操縦席に座った。戦闘機だけに操縦桿はステッキ型だ。その真中に機関砲の発射ボタンがあった。その将校に絶対に押すなといわれた。右手に操縦桿、左手にスロットルレバーを握り、両足を補助翼ペダルに乗せる。前面にはコンピューター制御で滑走路が広がる。将校の助けを借りて必死になって操縦した。滑走路がどんどん後ろに飛んで行く、大空が迫る。高度が落ちると自動音声装置が英語で“Pull up”と怒鳴ってくる。宙返りをしたり、水平回転をしたり必死の操作を続けていた。すると大勢のカメラマンを連れた男がやって来て私に挨拶する。私の顔が明らかにドイツ人ではないので吃驚(びっくり)している。誰かと思ったら国防大臣だ。シュミレーター操縦中の国民と対話している所を報道されたかったのだ。しかしさすがは政治家だ。何だ外国人かと言うがっかりした表情は見せない。私と握手する。私は日本人だが大臣の写真

を１枚撮らせて貰っても良いかと聞くと、勿論良いともと返事した。大臣が行ってしまうとその将校は緊張した表情で、我々には話す事も出来ない偉い人なんだと説明していた。

図５．ドイツ国防大臣ユング博士

外国では日本ではとても体験できない様な事が体験出来る。某国では陸軍の演習に参加して拳銃、小銃、機関銃の実弾を発射したり、本物の手榴弾を投擲したり、戦車砲弾の装填を手伝ったり、(さすがに発射させて貰う事は出来なかったが)、また国電を車庫から乗客が待っているプラットホームまで運転したこともある。もし、日本でそんな事が起きたら大問題となるだろう。日本人は兎に角真面目なんだと思う。真面目である事は美点なのだが、戦争や商売で外国を相手に戦うと奇想天外な発想にやられることが多い。だから欠点にもなっている訳だ。

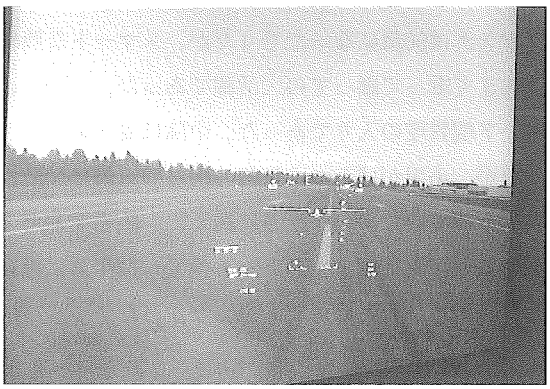


図６．シュミレーターから見た光景

3）ベルリン・オリンピック・スタジアム訪問

ベルリン滞在中にポップ歌手のマドンナの公演が会った。ドイツ・オーストリアの公演旅行を行っていたのだ。筆者がマドンナを見たのは彼女が主役を務めた映画『エビータ』の中でのみで、彼女の音楽には全く関心が無かった。それなのにベルリン公演を見に行ったのは場所が巨大なオリンピック・スタジアムであったからだ。1936 年にヒトラーがここでオリンピックの開会宣言を行い、国威を多いに発揚した。筆者が前回そこを訪ねたのはその36年後の1972年の事であった。そのころ話題になっていたのはベルリン・オリンピックのマラソンで金メダルを取った孫基禎に関してであった。当時朝鮮は日本の領土であったので、孫基禎も日本人であった。京城で発行されていた朝鮮語の新聞が優勝したランニング・シャツ姿の孫基禎の写真を掲載した際に日の丸を修正して大韓帝国の大極旗に変えたのが問題になり発禁処分となった事件があった。孫基禎のオリンピック優勝は日本に併合され亡国状態であった朝鮮民族の民族意識に火を付けるものであった。36年後の1972年にベルリンのオリンピック・スタジアムの優勝者顕彰の壁に刻まれていた孫基禎の名前と

国名のうちJapanという国名が削られKoreaとセメントで修正されているのが見つかり大騒ぎになった事があった。ある韓国人青年の仕業であった。日本の朝鮮統治の痛みがまだ忘れられていない時代であったのだ。

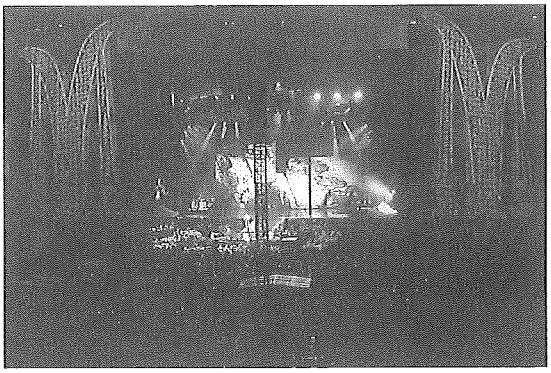


図7．ベルリン・オリンピック・スタジアムで歌い、踊るマドンナ

その1972年からまた36年が経ったのである。2006年のサッカー・ワールド・カップの決勝戦を開催する為に観覧席には屋根が掛けられていて、以前と印象が異なるのが多少残念ではあった。マドンナは50歳になったそうだが、スマートな肢体を保持し19時半から若干の休憩を挟み23時まで歌って踊っての大活躍であった。しかし、聴衆には初老の人が多く、満員には程遠い７割程度の入りであった。中欧は夏が終わると直ぐ冬が来る。まだ８月の末であったのだが、小雨がぱらつく気候の所為で気温は10度程度しかなく、筆者も夏服の上にジャンパーを着ていたのだが寒さに震えた。熱唱するマドンナに合わせて踊りまくる聴衆は少数派であり、大勢は全く静かなもので、72年前に熱狂的に「ハイル！ハイル！」と叫んでいた同じドイツ人とはとても思えなかった。

4）ウンター・デン・リンデンにて

ウンター・デン・リンデンはベルリンの中心であった王宮とベルリンの西の入口にあったブランデンブルク門を結ぶ華麗な大通りで、パリで言えばシャンゼリゼと言った所である。戦争の被害が大きかった上に、ソ連占領地区となったので、戦後は寂しい通りとなってしまっていた。それでも1970年代からは東独政府が力を入れて、プロイセンのフリードリッヒ大王の銅像を通りの真中に復活させたり、ベルリン大学からオペラ座に掛けての一角は歴史的建造物も再建させて戦前の雰囲気を、ある程度は偲ぶ事が出来た。しかし肝心の王宮は東独政府が爆破してしまい、跡地に共和国宮殿と称する巨大な建物を建てた。1990年にドイツが統一されると共和国宮殿は直ちに閉鎖され、若干の経緯はあったがその建物を解体し、その土台の上に旧王宮を復旧させることが決まり、ここ数年解体工事が続いてきた。この夏には解体工事は当

図8．共和国宮殿の残骸

然終了しており、王宮の建築工事が始まっているものと思い現場に行ってみると、驚いた事に解体工事はまだ続いていた。

土台を再使用するので慎重に工事を進めているのであろう。但し、鉄骨は殆んど外され、鉄骨を支えていたコンクリート作りの塔屋だけが幾つも残っていた。墓地の墓石の様で東独の墓のように思えた。

王宮の直ぐ横が昔のプロイセン王立歌劇場である。現在はドイツ国立歌劇場と称する。８月30日は今シーズンの初日で、ユダヤ人の劇場監督バレンボイムが直接指揮してベートーベンの歌劇フィデリオで幕を開けた。開演前に支配人が幕の前に出て来て「今からケーラー大統領が入場します。皆さん起立して拍手で御迎えしましょう」と告げた。筆者の席は１階の１列目の席であったので、起立して後ろを向くと２階席中央の１列目に大統領が来て着席した。皆盛大に拍手した。ヴァイマール共和国時代の大統領は強大な力を有していて、結局はヒトラーの首相任命に繋がったのを反省し、戦後の西ドイツの大統領の権力は殆んど無く（ドイツ統一後も同じ）、首相が略（ほぼ）全権を握っている。それでもケーラー大統領の人気は中々のもので、オペラ終演後も数百人の観衆が歌劇場の前に駐車していた大統領の公用車の周りに集まり、大統領の退場を待っていた。筆者も野次馬根性を発揮して30分程は待ったのだ。大統領の指揮者、歌手、楽団員達との懇談が長引いていた様なので、その場を去ったのだが、まだ多数のドイツ人達が待ち続けていた。それにしてもウンター・デン・リンデンのドイツ国立歌劇場で大統領を見てドイツ統一を改めて実感したのだ。丁度36年前の1972年には、筆者はここでロルツィングの歌劇『ツァーとツィンマーマン』を見たのだが、社会主義体制下であったにも拘らず、両肩を露出したイヴニング・ドレスを着用した多数の婦人方を見て、中欧の伝統文化は東独にも残っているのだなと感じたものだ。その東独があっけなく崩壊し、東西両独と東西ベルリンが統一する等とは思いも掛けなかったのに。

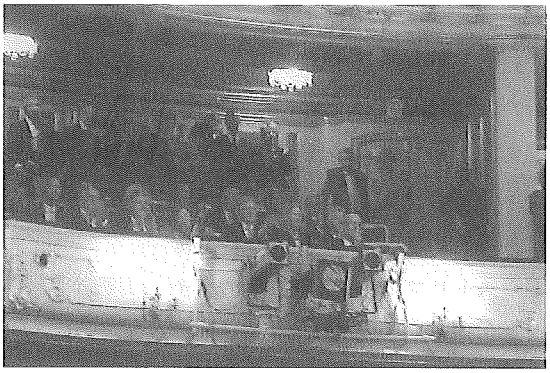


図９．ドイツ国立歌劇場でのケーラー大統領

５）ウィーンの銀行

オーストリア共和国政府が日本の資本市場で180億円の資金を調達する事となり、筆者が勤務していた会社が主幹事となった。筆者は1979年の１月にウィーンに１ヶ月近く滞在しオーストリア大蔵省と交渉し、契約書と目論見書を作成した。その時に協力関係にあった銀行がクレディットアンシュタルト・バンクフェラインと言う銀行だ。この銀行

は金融界で有名なロートシルト（英語読みだとロスチャイルド、仏語読みだとロチルド）家によって設立されたのだ。フランクフルトで金融業を始めたナタニエル・ロートシルトが５人の息子をフランクフルト、ロンドン、パリ、ウィーン、ナポリに分散させて、国際金融業務で協力させたのだ。ウィーンのクレディットアンシュタルトはその一つだったのだ。国際金融史では1931年にこのクレディット・アンシュタルトが破綻した事が国際金本位制崩壊のきっかけになった事で有名だ。破綻後はオーストリア国立銀行（中央銀行）に救済され、ヴィーナー・バンクフェラインと合併しクレディットアンシュタルト・バンクフェラインとなる。1938年の独墺合併後はドイチェ銀行に合併されたが、戦後は国有銀行として復活した。だから筆者が協働したころの会長は元副首相だったし、その当時の大蔵大臣が間もなく頭取になったりした。

オーストリアでは当時三大銀行が競争していた。クレディットアンシュタルト・バンクフェライン、エスターライヒッシェ・レンダー銀行、ツェントラールシュパールカッセ・デア・ゲマインデ・ヴィーンだ。筆者は1990年より1993年までウィーンに駐在したのだが、当時はクレディットアンシュタルトとツェントラールシュパールカッセが東京にも駐在員事務所を構えており日本との商売を拡大しようと活発に活動していた。ツェントラールシュパールカッセはウィーン市の機関銀行で、19世紀末に非常に人気があった当時のウィーン市長でドイツ国粋主義者のカール・ルエーグナーがユダヤ人に牛耳られていた銀行に対抗する為に設立した銀行だ。これらの銀行も1990年代に民営化され先ずレンダーバンクがツェントラールシュパールカッセに併呑され、合併新銀行の名前はアウストリア（オーストリアのラテン語名）銀行となる。1997年にはアウストリア銀行はクレディットアンシュタルトの全株式をオーストリア政府から取得する。更に2002年にはクレディットアンシュタルトと合併する。クレディットアンシュタルトには歴史があったので、新行名はアウストリア・クレディットアンシュタルト銀行となった。

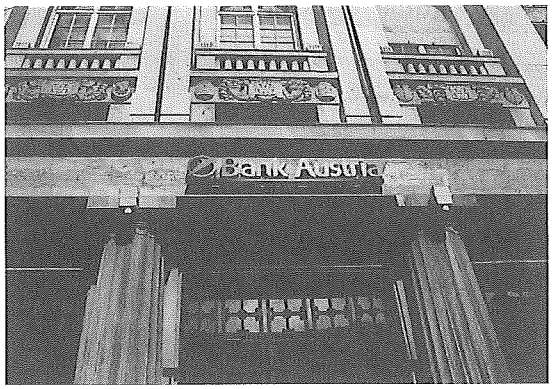


図 10. アウストリア銀行の新看板（旧クレディットアンシュタルト本店）

図 11. 旧看板が残るアウストリア銀行のシュヴェーデン・プラッツ支店

クレディットアンシュタルトの本店は19世紀半ばに当時の皇帝フランツ・ヨーゼフ１世がウィーンの城壁を取り壊して設けた華麗なリング通りに面している。クレディットアンシュタルトの資本市場本部は道を１本隔てた別館にあった。筆者はその中の１室を借り秘書も付けて貰って仕事をした懐かしいビルだ。合併されて本部機能が無くなったので資本市場本部は消えてしまい建物は空きビルとなった。その跡には現在、日本大使館と日本文化情報センターが入っている。今春までは本館の方にアウストリア・クレディットアンシュタルト銀行の表示があり、その建物が嘗てクレディットアンシュタルトの本店であったことを偲ばせた。ところが今回はクレディットアンシュタルトの表示が消えてアウストリア銀行のみの表示となってしまっていた。

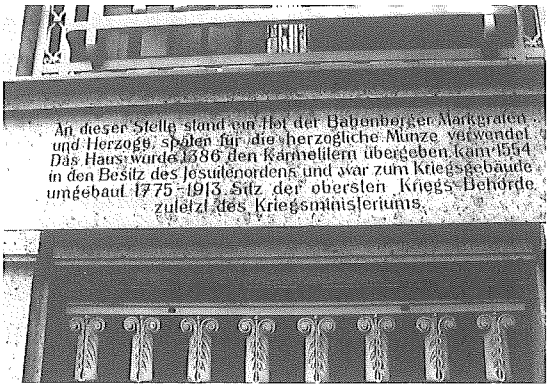


図 12. 旧エスターライヒッシェ・レンダー銀行本店の外壁にある由緒書き

その理由は金融界の栄枯盛衰の為だ。アウストリア・クレディットアンシュタルト銀行は最終的な勝者になることが出来なかった。ドイツ・バイエルンのヒュポ・フェラインス銀行に買収されてしまったのだ。ヒョポ･フェラインス銀行もバイエリッシェ･ヒュポテーケン銀行とバイエリッシェ・フェラインス銀行が合併して出来た銀行だ。筆者も後者とは色々と仕事を一緒にした事がある。そのヒュポ・フェラインス銀行がイタリアの銀行ウニクレディットに買収されてしまった。日本でも、アメリカでも金融界の有為転変は激しいが欧州に於いてもそうなのだ。クレディットアンシュタルトと言う名前には何のこだわりも無いイタリア人にはアウストリア・クレディットアンシュタルト銀行と言う名前は長すぎる。それで単にアウストリア銀行と改名したのだ。この様にして歴史のある名前が消えて行ったのは筆者にとって誠に寂しいことであった。

三大銀行の勝者であったツェントラールシュパールカッセの元本店はウィーン中部駅の駅上にあったのだが、現在は取壊し工事がほぼ終わっていた。レンダーバンク本店は第１次世界大戦直前まで陸軍省と参謀本部が入っていた由緒ある建物だ。それだけに取壊しは免れたが、内部は徹底的に改装し五つ星の高級ホテルに生まれ変わるそうだ。これらの状況を見て芭蕉の句「夏草やつわものたちの夢の跡」が心に浮かんで来た。

６）独墺合邦70年

1914年６月28日サラエヴォに於いてオーストリア・ハンガリーの皇位継承者フランツ・フェルディナント夫妻がセルビア人学生に暗殺され、その事が第１次世界大戦を勃発させ、世界を大きく変えてしまう事となった。その時にフランツ・フェルディナントが着用して

いた血染めの軍服と乗車していて弾痕の残る乗用車が展示されているので有名なオーストリア軍の陸軍歴史博物館で「'38年の進駐――1938年３月の軍事史的観点」と言う特別展が開かれていた。オーストリアはドイツに占領されたのだと言うのが以前の建前であったのだが、独墺合邦（アンシュルス）から70年が経ち当時の状況をより客観的に見ることが出来る様になってきた様だ。1938年３月12日のドイツ国防軍のオーストリア進駐に際して、オーストリア陸軍大臣ツェーナー大将はオーストリア軍将兵に対し前日の３月11日に平和的退却と無抵抗を命じた。その後に大臣室にて拳銃自決をした（2002年になって自決ではなくて他殺だと言う説も出ているが）。３月14日には全オーストリア将兵がヒトラーに対し忠誠の誓いを行い、オーストリアの軍服にドイツの国章、鷲とハーケンクロイツのマークを縫いつける。３月15日にはこの旧オーストリア軍部隊が進駐してきたドイツ国防軍の一部として、故郷に錦を飾ったヒトラーの前を分列行進するのである。ナチスに同調しているとして予備役に編入されていた将軍達や高級将校達は続々と現役に復帰する。かくて、軍事的には血を流す事無く独墺合邦が行われたのだ。独墺合邦に反対したのは客観的に見て少数派であった様だ。もっとも、一般のオーストリア国民がヒトラーのウィーン入城を歓呼して迎えたのは周知の事実であったのであるが。また、ドイツ軍の将校達がオーストリア軍将校の案内でこの特別展を見物していたのが驚きであった。総ては恩讐のかなたへ流れて行ったのかも知れない。

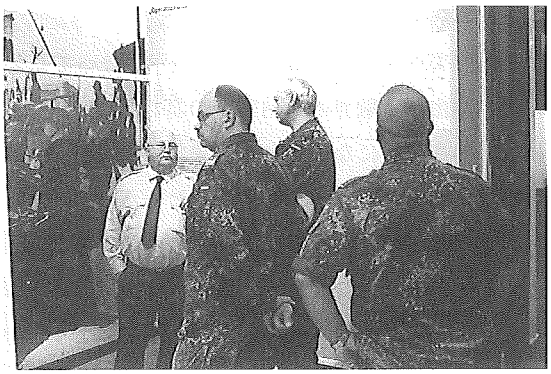


図 13. 独墺合邦特別展を見学するドイツ軍将校達

この独墺合邦に関しては３月にウィーンの映画博物館で当時のニュース映画、記録映画、劇映画が上演されていた。1938年３月のオーストリアのニュース映画に上海を行進中の日本陸軍の姿が出て来たのには驚いた。1937年末に敵国首都の南京を落とした直後で意気軒昂とした姿であった。ナチスの宣伝記録映画『言葉と行動』、ナチスの党歌『ホルスト・ヴェッセル・リート』で有名なホルスト・ウェッセルの伝記劇映画『ハンス・ヴェストマー』も上映された。ナチスをタブーとしてきた少し前にはとても考えられなかった事だ。但し、上映前にウィーン大学の現代史担当Ｓ教授の否定的で、批判的な講演があるにはあったが。その中に些細な間違えが１つあったので、講演の直後に観衆の前で指摘するのではなく、映画上演後に個人的に指摘してやったら、日本人にそんなことを言われＳ教授は目を白黒していた。

7）ベルトルト・ブレヒトと唐人お吉

ブレヒトの有名な戯曲『三文オペラ』はイギリスのジョン・ゲイ『乞食オペラ』を翻案

したものだ。ブレヒトはこういった剽窃まがいの事をよくやる。1940年にブレヒトはフィンランドに亡命中でフィンランドの女流作家ヘラ・ウオリヨキの荘園に滞在していた。その際に、山本有三の『唐人お吉』の英訳本をウオリユキに薦められて読み、感心し、ウオリヨキと共同で翻案し戯曲としたのだ。戯曲の題名は『下田のユーディット』という。ユーディットというのは旧約聖書外典ユデト書の女主人公で自らの貞操を犠牲として敵将ホロフェルネスの首を取り自分の町を救った古代ユダヤの女傑である。お吉もアメリカの砲艦外交から下田の町を救う為に幕吏のはからいでアメリカ領事ハリスの妾になって下田の町を救った芸者である。ブレヒトは英雄が英雄的行為を終えた後には、どの様な運命が待っているのかを戯曲で現したかったのだ。

Theater in der Josefstadt
1080 Wien, Josefstädter Straße 26, Tel. 01 - 42 700 - 300

Orchester links / Reihe 2 / Platz 1
Ecksitz

Die Judith von Shimoda
Dienstag, 09. September 2008, 18.00 Uhr
EUR 21,00 inkl. gesetzlicher USt. und EUR 1,- Renovierungsbeitrag

- Anonymkunden

Gute Unterhaltung wünschen Ihnen
Raiffeisen in Wien Meine Beraterbank
Bank Austria UniCredit Group
www.josefstadt.org
Bitte Rückseite beachten!

図 14. 『下田のユーディット』総稽古（ゲネラールプローベ）の切符

図 15. 『下田のユーディット』パンフレット

ブレヒトの遺稿には予定された全11景のうち５景分が残っていて、1997年にブレヒトが創設したベルリーナー・アンサンブル劇団がベルリンで「初演」した。ところが2004年にウオリヨキの遺品の中から全11景分のフィンランド語の遺稿がハンス・ペーター・ノイロイターにより発見され、欠落していた６景分がドイツ語に翻訳され、2006年に全 11 景分が刊行された。この『下田のユーディット』が2008年９月11日にウィーンのヨーゼフシュタット劇場で上演される事となり、ウィーン側は「世界初演」だと主張し、ベルリンのベルリーナー・アンサンブルは「初演」は我々だと主張し、この論争がドイツ語圏では大きく報道された。

ウィーンでの「世界初演」を見ようとしたが切符は売切れだったので、初演２日前の総稽古（ゲネラールプローベ）を見に行った。ドイツ人達が何とも奇妙な着物を着て、床に座り、右手で茶碗を握り左手で箸を操り、御飯を食べる光景には笑ってしまったが、オーストリアの観衆にはどうでも良い事だろう。ブレヒトのテーマである、英雄が英雄的行為を終えた後に何が来るのかと言う点は充分に考えさせる様にはなっていた。日本ではいつ初演されるのかは知らないが、是非見てみたいと思った。

Mitteleuropäischer Sommer 2008

Hajimu WATANABE
College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2008)

Die Geschichte um die japanische Volksheldin Okichi in „Die Judith von Shimoda" beschäftigte Bertold Brecht 1940 im finnischen Exil, und gemeinsam mit der finnischen Schriftstellerin Hella Wuolijoki bearbeitete er die Texte des Japaners Yuzo Yamamoto für europäische Bühnen. Allerdings hinterblieben im Nachlass Brechts mit fünf von elf geplanten Szenen jedoch bisher nur Fragmente des Stückes, die vom Berliner Ensemble im Jahr 1997 inszeniert wurden.

2004 fand der Literaturwissenschaftler Hans Peter Neureuter dann im Hause von Hella Wuolijoki ein Manuskript des kompletten Stückes in Finnisch, welches er übersetzte und mit den deutschen Fragmenten zu einer kompletten Geschichte mit Rahmenhandlung bearbeitete und 2006 publizierte[1].

Am 11. September 2008 hat man diese „Die Judith von Shimoda" im Theater in der Josefstadt in Wien präsentiert und als „Uraufführung" deklariert, sehr zum Ärger des Berliner Ensembles.

---

1 Bertolt Brecht, *Die Judith von Shimoda, Nach einem Stück von Yamamoto Yuzo, In Zusammenarbeit mit Hella Wuolijoki, Rekonstruktion einer Spielfassung von Hans Peter Neureuter,* 2006, Frankfurt am Main